

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 41

日本初となるコンクリート製 外洋防波堤・小樽港北防波堤は、 百年を超え今も港を守っている。

失敗続きだった港湾建設

明治時代、日本の港湾建設はまだまだ建設の歴史が浅く、築堤工事は政府が雇った外国人技師に頼っていた。しかし、大英帝国の技術者集団が造った横浜築港のコンクリートブロックが亀裂・崩壊するなど、当時のコンクリートは大変もろく、海中工事に使用することに対する信用性が全くなかった。そのような中、小樽築港の計画案が政府に認可された。

この頃の小樽港は、空知の石炭などを全国に送る輸送港であり、札幌の海の玄関口としての役割も担っていた。さらに小樽が国際的貿易港として発展するためには、強固な防波堤造りが急務であった。しかも、この小樽の北防波堤の建設は、政府の指示により、計画・設計から施工まで、日本人の手で推し進められることになったのだ。

近代港湾の父・廣井勇^{いさみ}

明治三十（一八九七）年、小樽港湾第一期工事である北防波堤の建設が始まった。わが国初めての、荒波の外海に本格的な防波堤を建設する工事であった。

小樽の北防波堤を設計・監督したのは、後に「近代港湾の父」といわれる札幌農学校教授・廣井勇博士（一八六二〜一九二八）だった。

当時三五歳の廣井は、北防波堤建設のため、農学校教授のまま北海道庁技師及び小樽築港事務所長として赴任し、工事の陣頭指揮に当たった。

自然が厳しい北海道。そんな北国の厳し



廣井勇（『明治大正期の北海道（目録編）』より転載）
明治29年頃。函館港改良工事監督当時か

さの中、築港工事の問題点を廣井がどのように打開していくか注目された。

廣井は独創的な施工方法を数々行い、関係者を驚かせた。

防波堤の建設は、まず国産のコンクリート開発から始めなければならなかった。海中にコンクリートを使用して築港工事を成功させるためには、非常に高い技術はもとより、寒冷地に適したコンクリートの開発も必要だった。

廣井は、外国のものを転用するのではなく、北海道に適したコンクリート開発に挑

み、試行錯誤の末、北海道の火山灰を混ぜるとセメントの強度が増すことを発見した。この技術はドイツで開発されたものであったが、防波堤工事にこの方法を用いたのは世界で初めてだった。

それに加えて、外洋の波圧を計算して、コンクリートブロックを斜めに積み重ねる工法を取り入れた。防波堤の端のブロックが荒波にもまれて抜け落ちるのを防ぐためのもので、当時の土木技術の最先端をいくものであり、世界から高い評価を受けた。

このときに用いた防波堤に作用する波力算定式が「廣井公式」であり、その後、長きに渡り防波堤の設計に用いられた。

大波に耐えた防波堤

工事が始まったのが、明治三十（一八九七）年五月九日。廣井は、少数の優秀な者だけを雇って品質管理を徹底。頻繁に現場に赴いて、自らスコップを持って陣頭指揮



小樽港（手宮駅及び防波堤を望む）（『明治大正期の北海道（目録編）』より転載）
明治39年7月、第1期築港完了後の内港

に当たった。

順調に進むかのように見えた工事だったが、廣井に思いもせぬ試練が襲いかかることもあった。明治三十二（一八九九）年には、大嵐が工事中の防波堤を直撃。廣井は防波堤が崩壊したときは責任をとろうと、自決用のピストルを懐にし、嵐が治まる頃に港へと向かった。そこで目にしたのは、見事大波に耐えぬいた防波堤の姿であった。

今も小樽の港を守る北防波堤

総延長二二八九メートルの北防波堤が完成したのが明治四十（一九〇八）年五月。既に十一年の歳月が流れていたが、廣井の努力と工夫により、日本の築港技術は一気に世界水準に達することができた。

それから百十三年。一万三千個余りの巨大なコンクリートブロックからなる北防波

堤は今も荒波に耐え、現役としてその機能を果たしている。

老朽化もあり、平成十七（二〇〇五）年から平成の大改修工事が行われたが、北海道開発局の調査では、コンクリート本体はほとんど劣化していなかったという。また、製造されたコンクリートから六万個以上の試供体が作られ、既に百年は過ぎたが「百年試験」として、現在でも経年変化を確認する耐久性試験が行われている。

北防波堤は平成十二（二〇〇〇）年に土木学会選奨の「土木遺産」に指定され、翌年には南防波堤・島防波堤とともに「小樽みなとと防波堤」として北海道遺産にも選定されている。

港近くの運河公園には、平成十一年に小樽公園から移された廣井勇の銅像（昭和四年建立）があり、今も静かに北防波堤を見守っている。



小樽みなとと防波堤（NPO法人北海道遺産協議会所蔵）
防波堤を空から見た様子。
完成から百年以上を経た今も港を守っている

北防波堤の成功によって 近代日本の港湾整備が進んだ



あうるの杜

俳人・銀化同人
松王かをりさん

Interview

樺太引揚げ以後、北海道で俳句を作り続けた藤谷和子さんへのインタビューを重ね、『最果ての向日葵～俳人 藤谷和子に聞く～』を出版した、松王かをりさんのあうるの杜です。

古都から札幌に

生まれは奈良です。二〇〇六年に夫が北海道大学の教員となり、それで札幌に。俳句はその二年ほど前に始めたばかりでした。私が札幌に転居すると言うと、「奈良・京都にはない自然という素材がいっぱいあるので、いい俳句が作れるね」と羨ましがられました。

確かに北海道には、向こうとは違うダイナミックな自然がたくさんありました。一方、奈良・京都にはちょっとした路地があり、そこに光は光、影は影という感じで、微妙な陰影や情緒があります。それが人の気持ちにも関係していて、こちらにはそういった縁がない寂しさ・物足りなさがあると思います。逆にこちらの方は「古都の人と違って、そのままで裏がないんですよ」とおっしゃいますよね。

作風の変化は

自分の句を見ると、北海道に来たことがどんなに私の句を豊かに

北海道との出会いが俳句を続ける原動力に



まつお 松王かをり

奈良生まれ。現在、札幌市在住。予備校の古文科講師。「銀化」同人、「雪華」会員、俳句集団「itak」幹事。
2004年 朝日カルチャーの津田清子俳句教室で、俳句をはじめ。津田清子主宰の「主」に入会
2006年 札幌に転居
2013年 中原道夫主宰「銀化」に入会
2015年 「銀化」奨励賞受賞
2017年 「未来へのまなざし—「ぬべし」を視座としての「鶏頭」再考」にて、第37回現代俳句評論賞受賞
2018年 「耳の曲線」にて第18回中北海道現代俳句賞受賞



しているか、ということに気づかれます。そのまま関西にいたなら、果たして俳句を続けていたかどうか……。未知の風土との出会いが、俳句を続ける原動力になったような気がします。

北海道には歳時記に載っていない独特の言葉があり、とても新鮮です。例えば「海明け」。春になり流水に閉ざされていた土地の人たちにとって、また新しい世界が開

俳句が取り持つ縁

けるようで、いい言葉だなと思いました。それから「根開け」。春になって木の根つこだけ雪が解けている状態ですが、それもこちらに来て初めて知りました。

二〇〇八年、NHKの「俳句王国」に出演しました。奈良の俳句の先生が札幌に行った私を「北海道に行った珍しい人もいるんですよ」と紹介したのでしよう。番組に来ていた方に、「札幌に来てから句会もなく知り合いも全然いません」とお話をしたら、「北海道にもあるよ。こんな人の句会に行ってみたら」と教えてくださいました。知り合いが誰一人いなかった私

ですが、番組がきっかけで句会を紹介していただき、そこでお友達ができ、誘われて入会した「中北海道現代俳句協会」の新年会で藤谷和子さんに巡り会いました。

俳句があつたからこそ、和子さんに会え、それが縁でインタビューをさせていただいて『最果ての向日葵』を出版することができたのだと、「俳縁」の不思議さ、有り難さを感じています。

『最果ての向日葵』

和子さんは、笑顔がステキな大変魅力的な方でした。中北海道現代俳句賞に応募したときの審査員が和子さんだったのです。初めて出た協会の新年会でご挨拶をしたら、「中現俳賞に応募してくださいさつた方ね。私も句会をしているから良かったらいらっしやい」とお誘いいただいたので、結社「草木舎」にうかがったところ、その句会がとても面白かったのです。

その頃和子さんのお年が既に九〇歳近くだったので、俳句を通して和子さんの人生を遺したいと思い、二〇一九年三月から二〇二〇年六月まで、インタビューを九回にわたって行わせていただきました。

終わったときに、和子さんが「私かをりさんに丸裸にされた」とおっしゃったんです。きつとプラ

イベートを裸にされたというより、自分の俳句を裸にされたという意味だったのだと思います。

この『最果ての向日葵』は、和子さんの自句自解があつて分かりやすいので、入門書にもなるし、俳人にとってはまた別の示唆を得られる書です。俳句とともに生きた藤谷和子さんの物語でもある、そういった本だと思います。

自作の句

北海道に来たからこそ詠むことのできた私の句をあげてみます。北海道の冬は長いのでどうしても冬の句が多くなってしまいます。

鉄紺の空雪こぼす寸前の

根雪とは死にきれぬ雪死なぬ雪

雪解川奔馬一頭宿したり

また、動物との出会いや食べ物

にも心を動かされました。

星星は定位置にあり鮭のぼる

白鳥の自在の首のおそろしき

北寄貝火の国の酒こぼし合ふ

なほ深くナイフを牡蠣へ夜の海へ

俳句は、過去・現在・未来、あ

の世・この世を自由に旅することができ、一七音の小さな方舟です。評論にも手を染めた今、作句だけではなく、「作」と「論」の二本のオールを操って、言葉の海を私なりに進んでいきたいと思っています。

「時代とともに変化する日本語」

日本語は時代とともに大きく変化しています。

「くだわる」という言葉もその一つ。「本物にくだわる」「くだわりの味」。こんな表現がいろいろなところ、特に気にすることもなく使われています。しかし「くだわる」は本来、「そんなつまらないことに、いつまでもこだわっていないで……」という文脈で使われる、もともとマイナスイメージのある言葉でした。つまらないこと、目先のことに自分の主張をすることが、「くだわる」だったのです。

それがいつしかプラスの意味に変化しました。「くだわり」具合がすごくすぎ、むしろ感心してしまうものとなり、やがてプラスの語感を漂わせるものになったのでしよう。

本来とは正反対の使われ方になったことにに対し、「正しい言葉遣いではない」と「くだわる」人も出てくるわけですが、多勢に無勢、「くだわる」という言葉には、もう否定のしようのないプラスイメージが定着したのです。

また、「今日はさわやかな一日でしたね」とよく使いますが、「さわやか」という言葉は秋の季語です。ですから春や初夏は「すがすがしい」を使うほうがよいようです。

「雨模様」も、ニュースの映像で雨が降っている時に、アナウンサーが「今日はあいにくの雨模様となり……」などと伝えています。しかし、本来の意味は「雨の降りそうな空の様子。今にも雨が降りそうで降らない状態」のことをいい、雨が降っていない「雨模様」とはいえないのですが、『広辞苑』では「小雨が降ったりやんだりすること」もありとしています。

本来の意味が廃れ、いつしか誤った解釈が定着していくという言葉は、他にも数多くありますよね。

O W L I N F O R M A T I O N

「俳句は、人生の履歴書みたいだね」

最果ての向日葵

俳人 藤谷和子に聞く

松王かをり・著

定価:1,760円(税込)

「あうるの杜」でもご紹介した松王さんによる俳人・藤谷和子さんへのインタビュー集。話し手の藤谷さんは昭和2年、樺太生まれ。終戦後、北海道への引き揚げ後に俳句と出会い、当時は数少なかった女性俳人として、2021年5月に生涯を閉じるまで60年にわたり句作を続けた。

歯切れの良いやりとりで明かされる句への評や当時の背景は、俳句を道連れに時代を生きた女性の人生の物語ともなっています。



中西出版
四六判、228頁
2021年7月刊行

芸術をめぐる5つのトポス

北村清彦教授北大退職記念論集

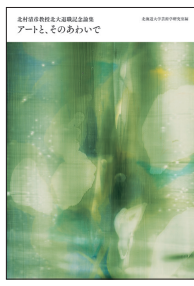
アートと、そのあわいで

北海道大学芸術学研究室・編

定価:5,500円(税込)

北海道大学文学部に芸術学講座(現・芸術学研究室)を立ち上げ、美学、芸術解釈学で北海道の芸術を支えてきた北村清彦教授の退職を機に編まれた、美術をめぐる5つの視点による論集。

芸術に関連する様々な領域で活動する卒業生が、それぞれの現在地からのアート論を結集。北海道、歴史、ミュージアム、批評、そして学問的方法の向こうがわへと、美の多様さを認め、その「あわい」で論じ合う記録の書。



中西出版
A5判、421頁
2021年5月刊行

マール最新作は、はじめての道外!

おばけのマールとモーニングのあとで

けーたろふ・ぶん

なかい れいこ

定価:1,320円(税込)

札幌の円山に住むかわいいおばけ、「おばけのマール」シリーズ第11作。朝からテーブルいっぱいのごちそうをほおばるマール。向かいに座るおばあさんといっしょに、これから出かけたい場所を次々とはなしていきませんが、マールが最後に行きたいと言ったのは……?

ついにマールが道外へ! どうして朝からごちそうなの? いっしょにいるおばあさんってだあれ? シリーズ第4作が縁を結んだおはなしです。



中西出版 A4変型判、24頁
2021年7月刊行

北海道の書を見つめた初の書論集

佐藤庫之介書論集

書の宙(そら)へ

佐藤庫之介書論集刊行委員会・編

定価:4,180円(税込)

北海道の書世界において先端的な批評活動に熱を注ぎ入ってきた佐藤庫之介。その初の書論集となる本書には、膨大な批評文から選りすぐられた、道内の書に関する史稿、各団体の会報・記念誌や作品集に寄せた書人論、新聞に寄稿した連載など多様な論考が収録されました。

人口減少が言われる書道界の活性化にも取り組む批評家の、次代を担う中堅・若手作家への熱い眼差しが伝わる論も掲載しています。



佐藤庫之介書論集刊行委員会
(発売元:中西出版)
A5判、435頁
2021年5月刊行

まあ、これさえあれば幸せだもんね。

海外好き公僕技官のビール紀行

吉井厚志・著

定価:1,430円(税込)

国土保全と環境保全の技術専門家として北海道の現場で活動してきた著者が、海外とビールにちなんだエピソードを紀行文にまとめました。1988年のフィリピン赴任から2015年の退官までを軽妙な筆致で描写。国土保全の最前線の複雑な思いや達成の喜び、国境を越え意見を交わす学者たちの交流がいきいきと捉えられています。

家族と仲間、そしてビールに支えられ、世界と日本の現場を駆け回った足跡です。



中西出版
四六判、233頁
2021年7月刊行

コロナ禍中の市民劇の克明な記録

旭川歴史市民劇

旭川青春グラフィティ ザ・ゴールデンエイジ

コロナ禍中の住民劇全記録

那須敦志・著

定価:1,980円(税込)

2021年3月、コロナ禍の北海道旭川市で戯曲「ザ・ゴールデンエイジ」の本公演が行われました。この劇は大正末期から昭和初期にかけての旭川を舞台に、その黄金期の青春群像を公募したキャストで演じる歴史市民劇。

旭川では3度目、約30年ぶりとなるこの市民劇はなぜ実現できたのか。多くの人の熱意が集まり街に再び市民芸術を芽吹かせた、復活の軌跡の克明な記録です。



中西出版
A5判、287頁
2021年7月刊行

